

# 体験的構造の侵害としての暴力

ティーモ・ブライヤー

中村拓也 訳

## 一序

暴力は近年の現象学研究のなかで重要な論題である (e.g., Dodd 2009; Liebsch and Mensink 2003; Santoni 2010; En-dress and Ramm 2013 の諸論考)。それは人格全体への脅威として通常——そして正しく——主題化される。しかしながら、体験的構造の差異化をもって、暴力が機能することは、いっそう詳細に分析できる。これは、本論がしようとすることであり、特定の構造が特定の侵害に対して傷つきやすいことを指摘する。私は、ミヒヤエル・シュタウディングル (Staudigl 2014, 2) に「暴力についての純粋経験は現存しない。それにもかかわらず、経験の諸々の異なるレベルと経験のなかで形成される意味の諸層は、暴力についてのわれわれの理解にとって基礎的意義をもつ」という点で同意する。現象学的説明にとつては、暴力の作用によってもたらされるそれらの障害を研究するためにこうした次元と諸層を踏査することが決定的である。ベルンハルト・ヴァルデンフェルスと共に、私は「暴力 [Gewalt]」を明

体験的構造の侵害としての暴力

白で持続的なトラウマ化へと亢進することがある種の侵害 [Verletzung] (Waldenfels 2006, 178) とみなす。

私は、人間的実存の基礎的関係性を身体と相互主観性の構成という点から身体と自己と他者が相互に関係づけられていることという二重局面性への反省によって吟味し、それによって、現象学的・哲学的・人間学的伝統からの古典的源泉に訴える。さらにまた、私はどのようにして身体性と相互主観性の構造が損なわれ、どのようにして経験が極端な類型の暴力としての物理的拷問や独房監禁によって変形されるのかを例証する。結論を経由して、私は両方の種類の侵害の間を比較する。

## 二 体験的構造としての関係性

哲学的人間学と同様に身体性の現象学でも最もよく知られた概念のうちの一つは、主観としての身体と客観としての身体の二重の構成である。私は「人間存在はつねに共同的に生ける身体 [Leib] であり、こうした生ける身体をこの物理的物事 [Körper] としてもつ」(Plessner 1970, 34) という事実を指示する。身体は、同時に、それを通してわれわれが世界を経験し、それから触発を受け取る媒体であり、他の質料的対象のなかの対象であり、同じ自然法則に服している。フッサールの言では、対象は一度に「経験する主観の知覚的器官」かつ「身体物体」(Husserl 1990, 152) 、すなわち「物理的物事、質料」(Husserl 1990, 153) である。感じており感じられている同じ身体的統一であるかぎり、人間の有機体「はそれ自身に反省的に関係づけられており」(Husserl 1960, 128) 、それは、経験の——知覚し知覚され、行為し行為を被る——同じ全般的過程の主観と客観である。

しかしながら、自殺について反省する際に、ジャン・アメリー——われわれは後で立ち戻ることになる——は、通常の周囲状況の下で「われわれはわれわれの身体である、すなわち、われわれは身体をもつのではない」ことを指摘する。「……われわれはそれを、他者の目をもってそれを見る場合……あるいは、それが重荷になる場合にのみ異他的身体として意識するようになる。しかし、こうした事例でさえ、例えば、われわれは、痛みゆえに『皮膚から飛び出』したいという表現があるように、身体は敵対的でもわれわれ自身、すなわち、われわれが脱したい皮でもあり」(Antevy 1999, 64)。これは、われわれのもつ身体は、非主題的に留まっているが、しかし障害が外側(例えば、暴力)からあるいは内側(例えば、病)から生起するときにはいつでも、その質料的性質と抵抗的性質のなかで主題的になる。われわれの身体のこうした局面は、主観が意のままに変えることができない自然のなかのその場所のせいであるから、身体は世界とのエナクティヴ的従事の道具であることから「敵」であることへ向かうことがあり、われわれの意図に反するそれ自身の力動性をもつのである。それゆえ「物理的身体の秩序と人格の秩序」の部分としての身体の「二重の忠誠」は「われわれのものである行為の力と世界秩序の属する事物の経過との分節点にある」(Ricoeur 1992, 111)。だから、身体を用いて、身体を通して行為するためのわれわれの可能性は、意志の強さや弱さ、獲得した習慣、われわれがすることにわれわれが意識的にする努力によってだけでなく、ちょうど同じだけわれわれの身体の質料性によってつねに制限され、パラメーター化される。

それゆえ、再三にわたって交渉する必要のある二つの局面の間の関係とそうした交渉にとつての傑出した場所が危機という状況である。ヘルムート・プレスナーは次のように書いている。「物理的現存のあらゆる要求は存在と所有、外側と内側の間の和解を要求する」(Plessner 1970, 37)。この和解は、諸々の異なる要素に焦点を当てるための注意

のための自由の程度を含む——われわれがわれわれの身体化された実存の「あいまいな設定」(Merleau-Ponty 2002, 106) について取る突飛なパースペクティヴによって開かれた——反省の領分を必要とする。しかしながら、極端な暴力という状況のなかで、諸々のパースペクティヴの融通性と和解のための可能性が破壊される。両方の身体的次元の擦り合わせの構造にある両価性とそれへの反省的關係は、経験の全体性に変えられる。経験の基本的構造の侵害によって創造されるものは、逆説である。すなわち、経験はある極と別の極とに同時に還元される。

メルローポンティが、二重感覚というよく知られた例をもって説明するように、一つの主観に属している二つの指が互いに触れるとき、「それらのそれぞれは現象的指と客観的指、相互性、交差、能動性と受動性のなかで対化された指の外側と内側である」(Merleau-Ponty 1968, 261)。以下の議論で見ることになるように、この相互性は、主観が自分自身の身体との共鳴を喪失する場合、すなわち、二つの局面を運動志向性という点から相互に結び付ける弾力的絆が断たれるときに、極端な暴力という状況へと転覆される。さらにまた、極的スペクトラムは、両方の極の過強調と分離とによって引き裂かれる。

身体・客観と身体・主観の二重・局面性と交錯的擦り合わせについての構想から離れて、他の像が、ハーバート・プリュゲによって引き起こされる。彼は二つの次元の間の極性のモデルを展開する。彼は、われわれが、分析的差異化にもかかわらず、経験の際に「身体のもつ肉体的次元と現象的次元の間の反定立」は存在し「ない」ことを意識すべきであることをわれわれに思い出させる。「ちょうど最も深刻な病の際のような完全な能動性のなかに、つねに両方が存在する。ただ諸々の等級、『量』、陰影、二つの性格のうちの一つの強調だけは異なる」(Pfüge 1970, 32)。主観としての身体についても客観としての身体についても純粹な経験は存在しない。前者は、心の脱身体化された、純

粹に感じる状態ということになるだろうが、その一方で、後者は完全に物体化され、脱生化された物体としての身体だろう。身体の「現象的」次元と「肉体的」次元の間の「極的差異化」というプリュゲの専門用語は (Pliège 1970, 23)、身体化された経験をスペクトラム上での転換と考えることを許すがゆえに、有用であり、純粋な身体・客観と純粋な身体・主観はその理念型的極である。これが一般的相関関係的構図であるならば、われわれは、スペクトラム上にどこにそれが位置づけられようとも、すなわち、その経験の体験的性質が客観的極に向かおうとも主観的極に向かおうともそれぞれの個体的経験を尋ねることができる。以下で例示されることになるように、それは、物理的拷問や独房監禁のような暴力についての経験を記述する実り豊かな仕方である。身体・主観と身体・客観の極的関係性に加えて、さらにまた、自己と他者の間のそれを見ることもまた重要だろう。

相互主観性への現象学的取り組みは、数多くの仕方、独自性領分の内部での他者のもつ超越論的機能という点から自己と他者の間の関係の意味を理解しようと試みており、これを相互主観的遭遇についてのいっそう具体的な内世界的現象を記述するための出発点と捉える (cf. Zahavi 2001)。経験のなかの他者の構成的役割は、身体・主観と身体・客観の交差的構造、あるいは、身体化された諸々の種間の相互身体性によって適法化することができる。われわれが、三人称のペースペクティヴからわれわれの身体のもつ物理的側面を経験することができるかぎりで (例えば、ある人の手を見ているとき)、自己の身体的構成の内部ですでにある種の異他性と対象性が存在する。メルローポントイにとって、この異他性は他者を異他的なものとして経験すること、だから、相互主観性の可能性の条件である。「私が、他の人間の手を握るとき、他の人間の現存在の証拠をもつ理由は、彼の手が私の左手の代わりになり、私の身体は、逆説的にその座であるあの『種の反省』の際に、別の人格の身体を併合する。私の二つの手は、一つの

単一の身体の手であるがゆえに、『共現存』するあるいは『共現前的』である。他の人格はその共現前の延長を通して現出する。つまり、彼と私は一つの単一の相互身体性の器官のようである」(Merleau-Ponty 1964, 168)。逆に、相互主観性は、身体性の二つの構成的次元の交差論的構造が侵害される場合に壊れる。相互身体的コミュニケーションの全般的統一は断たれ、それによって、自己と他者の分離が起き、そして、この分離は痛みを伴う全体性となることがある。

他者性のもつ超越論的機能は、知覚の領域と志向的対象の構成と「実在的なもの」としてのそれらの統握に関してもまた詳述されている。知覚の際に、われわれは、対象を有限なパースペクティヴから見、すなわち、対象はつねに諸々の射映のなかで、ある側面や他の側面から現出する。われわれは、対象全体についての完全な知覚をけっしてもたない。それにもかかわらず、われわれは暗黙の知識をもち、どのようにして対象が他の視角から見えるべきなのかに関する一定の予期をもつ。この知識を顕在的にする際に、われわれは一人の他者のパースペクティヴを取り、「そこから」対象を見る。シヨン・ギャラガーがわれわれに思い出させるように「フッサールによれば、経験されるものとしての世界の客観性そのものは他者らに依存している。これは、彼が超越論的相互主観性として指示するものである。……相互主観性は、それがわれわれにとつて整合的で有意義な世界のような何かを経験するための、厳密に言えば、それを実在的かつ客観的として経験するための可能性の条件であるという意味で、超越論的である」(Gallagher 2014, 2)。それは、まったく何も何らかの仕方で見出すことがないことを意味するのではなく、それと共に対象が現出する「実在性」という索引は、それらに対して取ることができるあるいはできるだろう諸々のパースペクティヴの多様に依存していることを意味する。諸々のパースペクティヴの複数性は、そうしたパースペクティヴの所

有者らの複数性を指す。それにもかかわらず「相互主観性は（諸々の）主観（性）の間の関係を明示し、したがって、前者は後者に先行できない」（Zahavi 2014, 30）。それゆえ、われわれは、二つの異なるレベルでの関係性、すなわち（他者が知覚的対象の世界の現出を共構成する匿名的な機能である）超・越・論・的・相・互・主・観・性・と（他者が私が身体的、社会的な仕方でも遭遇する別の人格である）内・世・界・的・相・互・人・格・性・とでの関係性について語るべきである。両方のレベルの相互遊動は、以下の考察にとつての指導的撚糸である。

### 三 暴力を通じた関係性の障害

身体化された相互主観的経験のもつ先に言及した構造に基づいて、私は、別の動作主（個体的であれ集合的であれ）によって、志向的に、意図をもって、方略的に課せられるかざりでも、暴・力・を基本的な、まったく文字通りの意味で、これらの構造の多くのうちの一つの侵・害・と理解することを提案する。もし多くの体験的現象が（自己と他者の間のあるいは身体の主観性と客観性との間の極性のような）両面的構造をもつならば、暴力に取り組む一つの仕方は、徹底化を探究することであり、そのなかで、体験的スペクトルムの二つの極のうちの一つが優勢になる、すなわち、それらの間の均衡が一つの極端へと転換される。そうした徹・底・化・はまた意識のその様々な局面のうちのひとつへの還元とみなすこともできるだろう。

三、一 物理的拷問

拷問は、『合衆国、拷問および他の残虐な、非人道的な、又は品位を傷つける取り扱い又は刑罰に関する国連条約』（一九八七年）によれば、故意かつ目的をもつて人に対して与えられる「物理的であれ心的であれ、重大な痛みや苦痛」と定義されている。明らかに、歴史的に追跡可能な形式の拷問は非常に莫大であり、現象学的記述は、時代を超えた様々な類型を超えて安定的である二、三の共通の局面を選ぶことができるにすぎない。以下で、私は、具体的な効果という点から最も顕著な特徴であり最も議論の余地がないものとして物理的痛みや苦痛にのみ焦点を当てる。物理的力を用いない多くの形式の拷問と、物理的要素と心理学的要素の間の相互遊動が、哲学的分析同様に経験的研究にとつても主要な重要性をもつ。それにもかかわらず、本論の範囲のために、私は、痛みについての具体的な経験を単離し、物理的拷問によって侵害される身体性の構造を反省する。さらにまた、私は関連ある形式の拷問を、身体に危害を加えることを通して人間存在の基素的関係性の破壊行為としての心理への意図的な不法侵入 (Sironi 2007, 79) と捉える。

エレヌ・スカリーは、彼女の広く議論された説明のなかで、拷問を三項的現象として定義する。「拷問は、その最大の輪郭では、別々の連続的階梯に分離されるならば、以下の秩序で生起するだろう三つの現象の一定不変で同時的な生起である。第一に、痛みが強烈になり続ける仕方でも人に課せられる。第二に、痛みは、身体の内側で連続的に増幅され、また、身体の外側の人々に可視的にされることで、客観化されるといふ意味でも増幅される。第三に、客観化された痛みは痛みとして否定され、力、動作主の強迫的省察によって可能にされる翻訳として読まれる」(Scarry 1985, 28)。本論の目的のために、私はただ物理的痛みと、先に概略が示された身体的構成の際の主観性と対象性と



いう極的局面性にとつてのその含意とがもつ局面のみに取り組む。さらに言えば、拷問の墮落させられた相互主観性の「否定的社会性」(Staudigl 2014, 4)が扱われ、それはまた独房監禁の主題化への移行としても役に立つ。

先に導入された概念に基づいて、われわれは何よりもまずこう言うことができる。拷問によつて課せられる極端な痛みは主観をして、彼の身体への関係を、身体的レベルでの、つまり身体と物体の間の関係の障害のせいで失わせる。「物理的痛み状態にあり、その鋭さの力とそれに曝されていることのものできることもできなさは明らかである。痛んでいることは防衛的に自分自身の身体に、それもそれに対するさらなる関係を見出さないような仕方、投げ返されていることである」(Plessner 1970, 132)。痛みの時間性と空間性に関して、身体の主観的次元と客観的次元の間の極性の不均衡と自己と身体の間の遮られたコミュニケーションは「痛みがある人の注意の焦点を現在に当てさせる」(Leder 1984, 255)状況をもたらし「痛みは宇宙の身体の無媒介的接近への縮小としてか、宇宙全体を満たすまでに膨張する身体としてのいづれかとして空間的に経験」(Scarry 1985, 35)される。こうした仕方、状況に閉じ込められることで、「私はできない」へと変貌する。キネステゼ的、知覚的空間は劇的に制限される。この「私はできない」は捕らわれている間ずっと到来するすべての経験にとつての疑似超越論的背景となる。状況を変えることと権力をもっている人々の意志と行為にすっかり依存していることができないことの確実性は、結果の不確実性と連動している。こうした仕方、曝されることで、ある人の傷つきやすさについての意識は劇的に高められる。

拷問の脈絡で、この傷つきやすさ——それは、「身体的傷つきやすさ」(Butler 2006, 29)として、人間であること、の存在論的構造とみなすことができる——は、犠牲者のストレスレベルを増大させるための共通の方略として衝撃と

痛みの結合によって不当に使われる。以前のユーゴスラビアからの拷問生還者とのインタビューに基づく最近の研究が示すように、多くの拷問方略は「ストレッサーの予測不可能性と管理不可能性を強化することによって心理学的衝撃力を最大化するために」(Basoglu 2009, 141)用いられる。こうした予測不可能性が拷問の受難性格に付け加わり、それは以前に獲得された経験と習慣のもつ生世界的地平の破壊となる。要するに、状況がストレスに満ちていることは、諸々の異なる形式の拷問の組み合わせによって増大し、例えば「打撃や電気ショックのような、様々な形式の物理的拷問の悲惨な効果は、目隠しすることや覆いを被せることによって論証されるかもしれない。なぜなら、後者の手続きがストレッサーに対する視覚的管理を取り去り、それによってそれらをいつそう予見可能でなくし、管理可能でなくするからである」(Basoglu et al. 2007, 283)。(諸々の)拷問のパスpekテイヴから、それはすべて「全体的管理の現象学的実在性の創造にかかわる」(Levinson 2007, 151)。

フレデリック・ボイテンディクによって展開された現象学的・人間学的取り組みによれば「突然の痛みは、ある種の打たれることである。それは有機体と境遇の間のコミュニケーションの準備のできていない『中断』である」(Buyendijk 1948, 129)。衝撃の経験は、拷問の際に道具化され、主観の、闘争すべき脅威としての、それ自身の向かいにある何かと直面することである。単なる衝撃としてよりもさらに先に進む痛みによって、主観は「その心理物理的統一を攻撃される」(Buyendijk 1948, 131)。痛みは身体のみならず身体を通して生じる。それは背を向けることによって逃れることができない。全体としての、つまり、身体と物体としての身体にとって構成的である関係への関係に生きる人格としての主観の領分が、極端な痛みによって侵害される。ある人の身体の脱出不可能性が、独自の、単なる痛みの感覚を超える苦しみの源泉である。それゆえ、痛みと苦しみの間の差異化は当を得たものであり、したがっ

て、苦しみはまったくの痛みの上の余剰としての反省性を指示している。「実際、痛みの強烈な不快は、苦しむ人間が感じている無力さの表現であり、この不快は、痛むことそのものから区別されるべきである」(Buytendijk 1948, 127)。激烈な物理的痛みのもつ情感的性質が襲い掛かってくるのに対して、そうした感覚からの深いや苦しみはすでに主観の応答、それに対して取った姿勢の結果である。

今や、ジャン・アメリーによる拷問についての経験の有名な記述に向かうことにしよう。そのなかで、彼は身体を拷問者の悪意ある行為の対象としてだけではなく、道具化され、それ自体に背を向ける動作主をもつものとして性格づける。動作主を身体から切り離し、それを悟性の働きに任せるだろうカント的解釈に抗して、ヤンナ・ファン・グランスヴェンは「自分自身の濫用への不随意的だが能動的な参与の可能性と敵としての自分自身の身体そのものとの遭遇について説明するために」(Van Grunsven 2014, 151)、「われわれが異なる説明を必要とすることを説得的に示す。そうした説明は「生きられるものとして、私である何かとしての、つまり、それを通して私が取り囲まれている世界に対して私が開かれる何かとしての私の身体と、ある種の事物としての、私がある種の異の対象であるが、それにもかかわらず私である対象として遭遇することができるように私をもつ何かとしての私の身体の間を区別する」(Van Grunsven 2014, 151)「自己」についての構想から出発しなければならぬ。主観とその身体の間のこうした逆説的關係を正当に扱う探究にとつての概念的源泉は、先に言及された現象学的概念のなかに見出すことができる。

アメリーに見出される身体についての経験の一人称的説明は、幅広く受け入れられ論評されている。拷問を通して「生ける人格が徹底的に肉へと変貌することがあり、そのことによって、なお生きている間に、部分的に死の餌食とされることがある」(Améry 1980, 40)と彼は主張する。拷問を受けるとき、身体は「その変幻自在な性格を失い、

一つの場所——ここ——と一つの時間——いま——に釘付けにされる」。だから、固着した身体は「質料として」理解することができ「物体化は質料化として」理解することができる。「人間存在が質料的存在であるという常識的にありきたりな事実は、結局、拷問のような極端な状況のなかでのみ経験することができるだけである」(Griny 2003, 100)。クリステイアン・グリユニーの評価に従い、こう言うことができる。拷問は、身体が拷問下で自分自身に対して異他的で抵抗的であることと拷問者の気まぐれの対象であるものとして経験されるから、主観を身体的に二重の構造のもつ対象的・質料的次元へと還元あるいは徹底化することになる、と。

けれども、私の見解では、事柄をいっそう込み入ったものにするのは、経験される痛みが主観的空間を完全に満たし、したがって、意識がすっかりなくなる点まで、他の何も感じる事ができないから、拷問は身体性の主観的次元の徹底化になるという等しくもっともらしい主張である。物理的拷問は、十中八九犠牲者にその一人称的情感的主観性において彼の身体を経験させる。なぜなら、彼は、その客観性への三人称的な想像的で反省的接近という意味では彼の身体への距離を失っているからである。換言すれば、人は強烈な痛みの中の瞬間には、感じる存在、外部の影響に対して受容的な共鳴空間であることに還元される。そうした状況の性格特徴は、自分の身体にとらわれているという感じ、どんな仕方でも（知覚的にも、対象や場面へと注意の焦点を当てることによって、認知的にも、事態について考えることによって）その境界を超えることができないう感じである。エナクティヴな従事の構成要素は、その中で身体は「世界を所持する」(Merleau-Ponty 2002, 169) 媒体と、それを用いてわれわれが知覚的で相互作用的空間を変様させる道具として機能しているが、その否定性という点で経験される。しかしながら、状況への何らかの隔たりが保持されるならば、身体的自己意識（無媒介的に経験される情感的状态としての痛み）と身体的自己意

識（痛みの媒体とその状態の担い手としての身体についての経験）の間の隔たりが独自の苦しみの源泉となることがある。

私は、こうした記述的近似化は同じメダルの二つの側面を指していると論じるだろう。拷問を受けている主観は自分自身を彼の身体の客観性と主観性に同時に還元されているものとして経験する。それは逆説的である——そして恐らくこの逆説こそが、感覚的経験としての痛みを超越するレベルでのこれまで以上の苦しみを惹き起こすのだろう。こうした仕方では理解されれば、われわれが主観と客観としての自己自身の存在のスペクトラム的連続体を考察するならば、拷問はこの連続体を両極に同時に圧力をかけることによって引き裂き、それを反対の方向へと引っ張り、それによって、経験の際につねにそこにある緊張の爆発を創造する。

今やわれわれは、自分の拷問された身体についての主観の自己経験を超越て行き、自己と他者の関係性を含むならば、拷問は「社会的世界の全体的転倒」(Amey 1980, 35)であることが明らかになる。「破壊的痛みの社会的認識」(Griny 2004, 190)によって、主観は社会的に誘発される反社会性という状況のなかに位置づけられる。痛みという苦難は、他者に対する権力の行使の原型的象徴 (cf. Le Breton 2006) あるいは「強制力の普遍的道具」(Morris 1991, 184)とみなされている。拷問の際に他者の手許の痛みの経験は暴力と権力の間の本質的結合を前景にもたらず。意図的に目的をもって課せられるように、そうした痛みは「他者による私の自己の境界侵害」であり「それは助けの期待によって中立化されることもなく、抵抗を通して修正されることもない」(Amey 1980, 33)。他者からのどんな助けの機会も不在であることは、それによって苦しみの主要な源泉である。人間学的に語れば、人間は、生き残るために誕生から他者の助けを要求する。進化論的人間学と比較心理学の最近の研究が示唆するように、助けることは人間

の社会的認知の核にあり、基本的な人間学的特徴とみなすことができる。共同目標をもつ共同的活動に従事することや自分自身にとっての明白な利益なしに危うい状況下で利他的に他者を助けることはすでに一歳にして人間のふるまいの性格特徴である (Warneken and Tomasello 2006, 2007, 2009)。

「生理学的早産」(Portmann 1956, 49) と最初の「子宮外位相」(Portmann 1973, 86) での傷つきやすさとのせいで、人間は自分の介護者らに完全に依存的である。助けられることと「助けの期待、助けの確実性は、実際人間存在の基礎的経験のうちの一つである」(Ameiy 1980, 28)。さらにまた、暴力は予料と充実というこの構造への攻撃であり、他者が自分の助けに来るかもしれないという可能性への信頼を瞬間的にであれ恒久的にであれ破壊する。暴力行為の際には、補助構造(助けることと助けられること)が不当利用され、それへの信頼が破壊される。もちろん、これは、多くの異なる仕方で生じることがある。最も凄惨な方法のうちの一つは向社会的人間的衝動を、それを所有している個体に敵対させることである。ナチの強制収容所では「怪我をした仲間をさっと助けようとした」どんな囚人も「容赦なく打ち据えられた」のは共通の罰だった。「自発的援助は直接的に犠牲者と助けようと試みる者だれもとの危害に転換された」(Sofsky 1997, 83)。

そうした極端な暴力によって、助けることへの動機づけと助けられる可能性は否認される。拷問の舞台的な状況のなかに、相互作用的空間の根底的転換が存在する。「ただ囚人の安定的に縮小する地盤こそが拷問者に彼の領土の膨張感をえささせる」(Scurry 1985, 36)。自己と他者の極性に関して、状況に対する管理は一つの極だけに、つまり、拷問者の極に集中し、それによって深淵を創造する。「二つを分離する距離は多分二人の人間存在を分離することができ、最も大きな距離だろう」(Scurry 1985, 36)。たとえば、彼らの物理的密接が非常に密接しており彼らの身体の状態

の表示が非常に明白に可視的であろうとも。この距離は、状況がそうした逆説的・近接によって性格づけられるがゆえに、そのように最大限に経験されるのである。それは、拷問される主観の完全な内的孤立、拷問者からだけではなく、すべての人間性からの孤立に至る。ある形式の根底的暴力のような孤立は、自己と他者の間の「原本的絆」(Klein 2013, 38)として機能する、主観性の根底にある関係的構造の転覆としてのみ可能である。暴力的に途絶されるならば、この基素的結合は失われ、それは自己と他者を対立者と敵にさえ変えるのである。

### 三二 独房監禁

序論で、私は物理的拷問と独房監禁を極端な暴力の二つの様態として言及してきた。この分類法は正当化を要求するが、しかし、諸々の論証は哲学的探究と経験的探究に同様に見出すことができる。その中では、両条件下での主観性と相互主観性のもつ基礎的構造の侵害が吟味される。現代の監獄システムのなかでの独房監禁についての包括的研究のなかで、リサ・ギンターはこう要約する。「志向的意識として構造化されるが、しかし、世界についての多様で、終わりが決められていない知覚的経験を奪われている諸人格、あるいは超越論的相互主観性として構造化されているが、しかし他者への具体的な関係を奪われている諸人格は、それらに背を向け、それらの基礎的関係性を不当に利用されたその世界内存在の構造そのものをもつ。これは、最悪の形式の拷問であり、すべてのいっそう明確な形式の拷問が基づいている原理である」(Guenther 2013, xv)。

われわれは、独房監禁が（現実の経験から長期にわたる諸々の結論まで）すべての局面で最悪の形式の拷問であると言ふ必要はない。しかしながら、われわれは、それがある種の拷問と、とりわけ、不承不承定義するべきでは

ない。この評価は、拷問の長期間にわたるトラウマ的效果についての研究によって確証される。孤立や他の種類の心理学的操作のような「監禁中の虐待」は「それらが引き起こす心的苦しみの過酷さ、トラウマ的ストレスの根底にある機構、それらの長期間にわたる心理学的結果という点から物理的拷問と実質的に異なるように思えない。だから、これらの手続きは拷問になる」(Basoglu et al. 2007, 277)。われわれが、極端な暴力の第二の形式としての独房監禁に向かうならば、こうした考察から結果する分類法がそれを物理的拷問、つまり、下位類型の拷問と同じレベルに置くことを念頭に置くことが重要である。

人間が「相互関係的、相互身体的存在」(Guenther 2013, 84)であるという現象学的明証に照らして、独房監禁は経験の相互主観的構造の侵害とみなすことができる。こうした罰が行使された、行使される諸々の仕方に諸々の差異が存在しようとも「共通の要素はいくらか高い程度の孤立である——かなりの時間にわたる囚人と他者らの間の相互主観的接触の縮小や完全な消去」(Gallagher 2014, 1) あるいは、先に導入された専門用語では、自己・他者の極端な自己への還元である。そうした孤立に服している囚人たちが示す諸々の反応は「不安、疲労、混乱、パラノイア、抑鬱、幻覚、頭痛、不眠症、震え、無気力、胃痛、筋肉痛、刺激過敏、不快感、劣等意識、引きこもり、孤立、激怒、怒り、攻撃性、集中困難、眩暈、時間間隔の歪み、深刻な退屈、記憶障害」(Gallagher 2014, 4) のような幅広い心理学的、肉体的障害を含む。

物理的拷問とは異なり、自己こそが、孤立することで自己自身の拷問者に転じる——まったく文字通りに、退屈な状況にある諸主観が、完全な不活性性にとどまるよりもむしろ自己自身への電気ショックを施すだろうことを示すように (Wilson et al. 2014)。諸々の個体は、物理的拷問によって課せられる危害と比較できる仕方でも自己自身を傷つ



けるところにまで至ることがあるかどうか疑わしくとも、自分自身と一人きりでいるという解離的権力に注目することが重要である。この解離は、同時に主観内部的布置の主観と客観であることによってある人の自分自身との距離の可能性を共感的に意識するようになることにある。ほかにすることがないことで、言及された実験下の諸々の主観は、自分の身体の二重局面性を用いる。諸主観は、こうした態度に表すことの対象としての自分の身体を用いることによってそもそも何かをする主観的衝動を態度に表す。(實在的他者が不在のなかでの) 経験の自己の極への還元はまさに自己の障害に至ることがある。だから、自己は、現象学者らによってだけでなく、また、例えば、社会心理学で示唆されるように、自己である他者を必要とする (Mead 1934)。

身体性についての現象学的理論にとって、社会的に課せられる監禁の孤独のなかで、「囚人ら」自身の身体感覚——痛みを感じ、自己自身の痛みを他者の痛みから区別する基礎的能力さえ——は、それらが危害を加えられたり自己自身に危害を加えたりするならば、もはや確実ではない点にまで侵食すること (Guenther 2013, xi) が決定的である。独房監禁が、自己と他者の間を分け隔てる能力の喪失を、基本的な感覚的シミュレーションのレベルでさえ、惹き起こすことがあるならば、術語のフッサールの意味でのどんな「正常性」も主観に対して頓挫する。フッサールにとって経験の際の正常性が、知覚の際に詳細の増大し続ける明確性の可能性によって保証されることを思い出そう (Taipale 2012)。最善の、だから最善に正常な、知覚的経験は、対象の諸局面の最大限が現前呈示されるものだろう。刑務所の独房の単調で差異化されない知覚的領分を想像するならば、最善性基準の崩壊は、知覚的システムの過剰作動をもたらすことがあり、ただ荒涼とした壁が存在する運動の限界や印象を産出するのは驚くべきことはない。主観が知覚的世界のなかの多数の局面をエナクティブ的に踏査し、対象への差異化されたパースペクティブをえる可能性

が存在せず、ただ諸々の印象の同じさだけをえるにすぎない場合に「変則的な」知覚されるものの発言はほとんど埋め合わせであるように思える。

さらに言えば、いっそう気掛かりでさえあるが、囚人らの一人称的報告は、自己と他者の間（と身体と物体の間）を差異化する能力が長期間にわたって孤立した後で壊れることを示唆している。われわれが人格を、身体・物体関係への関係を維持する主観であると捉えるならば（Plessner 1975, 365）、人格そのものと全体としての人格がここで危機に瀕していることは明らかである。これは、われわれが、自己と他者、我と汝の差異化がぼやけ、意識が主観内部性と超主観性が網目状になる状態に陥らないために、具体的な他者との体験的遭遇を必要とすることを示唆する。

「応答する存在」（Waldenfels 2015, 15）として、われわれは、諸感覚を通して受け取る刺激、われわれが経験する有意味な経験、われわれが襲われる出来事、巻き込まれるに偶発事に反応し、最も重要なことには、われわれは、諸々の他者の要求と訴えに答える。物理的・社会的孤立はこの応答性をさかさまにする効果的道具である。単独化の根底的形式として、それは主観を、人が生世界のなかで遭遇する多様な知覚的現出からだけでなく、他者との共同企図の領分から、すなわち、一緒にことを行い、目標を達成する実際の領分から引き離す。私の指標的な指示の領野、すなわち、図・地の区別のもつ最も基本的の意味においてさえ、私の生世界的地平を維持するために、私は他者を要求する。これが相互身体的共鳴、まなざしの交換、共同注意の三角測量の際に達成され、それらは高階認知にとって個体発生的に必要であるだけでなく、相互作用の際に再活性化されねばならず、さもなければ基本的知覚的構造は途絶する。興味深いことに、互いのまなざしと共同注意がある一定程度まで可能である場合に、他者との視覚的遭遇は、実際には孤立から解放されない。すなわち「特別厳重監視房のなかの囚人らは個体的人間存在が生き残る

ために必要であるあらゆるものをもっていかもしいれない。つまり、彼らは、訪問者と相談するテレビや閉回路テレビ (CCTV) ビデオのような『おまけ』へのアクセスすらもつかもしいれない。それなのに、主観をぐらつかせる恐れのある、他者との定期的な身体的接触の不在、触れたり触れられたりする可能性すらも不在にかかわる何かが存在する」(Guenther 2013, xiii)。

手短に言えば、それは、他者が知覚的対象の構成にとつての超・越・論・的・機・能 (匿名的な開かれた相互主観性) であるということだけではない。他者はまた相互作用の相手として経験的に現前しなければならぬ。独房監禁が示すように、他者の身体的現前なしに、主観は最も基本的な対象と特徴すらの意味を失う。すなわち、主観は幻覚を起こしはじめ、自分の身体に属するものと外側の世界の一部であるものの間を差異化する能力が阻害される。なるほど、世界についての知覚や自分の身体についての感覚のなかのそうした変則的经验はなお主観についての経験である。それらは、その主観にとって特定の「私にとってどのようなかということ」(Zahavi 2014, 88) をもつが、しかし、それらの所与の特定の様態は異他性という様態なのである。

繰り返せば、他者は物理的・社会的に定期的間隔で現前する必要がある、さもなければ、生物学的・心的健康が危険にさらされる。言語剥奪実験についての歴史的報告 (Gara 2003, 82) は、子どもたちが、いつそう長い期間にわたる相互身体的人間的接触を奪われるならば、食物への十分なアクセスをもっている場合でさえ、通例死ぬことを示唆する。そして、ギョウンターによる独房監禁についての研究が示すように、孤立した大人らにはしばしば統合失調症の兆候を展開する。「統合失調症は、世界が私自身の私秘的经验の限界にまで縮小する空間の病理学であり、そうして実在についての私の感覚を『世界がもはや当然と捉えられることがない』点にまで不安定化するならば、長引く独房監

「禁は囚人のなかの統合失調症のような何かの産物になる」(Guenther 2013, 174)。

実在の人々との現実の遭遇が対象と整合的知覚的実在の構成のための必要要件であるならば、身体に関するメルロ・ポンティの記述からえられる超越論的なものと経験的なものとの間の相互遊動は、だから、自己と他者の関係にまで拡張することができる。身体の二重の構成が両方のレベルの厳密な分断を台無しにするだけではなく、独房監禁という極端な状況は、世界についてのわれわれの経験のなかで働く超越論的相互主観性と内世界的相互人格性の二重機能性が存在することを前景にもたらず。実在についての感覚が蝕まれ、対象の境界が溶解し、身体と心の延長は独房監禁という拷問を受けている主観にとって疑わしくなる。さらにまた、脱・実・在・化(実在感の喪失)は離・人・症(自己感の喪失)と連動する(精神医学的定義に関しては以下参照。Coons 1996)。

#### 四 結 論

見てきたように、物理的痛みによる暴力と孤立による暴力の両方は、人間の主観性の関係的構造への過酷な攻撃である。この関係性は、自分のペースペクティヴと代替的ペースペクティヴの相乗効果、身体・主観と身体・客観の二重局面性、他者との相互身体的共感のような諸々の異なる形式を取る。生世界のなかでの具体的な遭遇という点から、他者は、主観が自己自身と作用とに定位するプラグマティックな地平から共に成り立っていることが重要である。「ある人自身の実存は、ある人が他者と共有する諸々の種類のプラグマティックな企図のなかで経験する何かである」、すなわち「自分の計画は……他の人々を——共働者、意図をもった受容者等々として——含蓄する」(Callagher

2014, 2)。実際の行為と相互作用の相互的未決性は、暴力によって覆される次元である。

物理的拷問の事例では、それは、拷問者は被拷問者と共に働くのではなく、ひたすら被拷問者に反対する状況へと変貌する。拷問者が痛みを負わせるという措置に対する犠牲者の反応に細心の注意を払い、それに応じて自分自身の行為を調整すると言いうことができようとも、犠牲者は、どんなことであれ能動的な加害者が考えたりしたりすることの完全に受動的な受容者とされ、それによって「行為者と受動者の極性」(Ricoeur 1992, 223)を徹底化するがゆえに、相互・作用は存在しない。

独房監禁による孤立の際にもまた、他者と共にあるという実際の次元の不在がある。なぜなら、明らかに他者はそこで共同企図に従事しないからである。この物理的不在を認知することの凡庸さを超えて、潜在的な相互作用の相手としての他者は、いっそう根底的な仕方では不在なのである。すなわち、相互作用は、認知の基本的な形式を含まれており、それが不可視化されることによって不在化され、公共的空間に参加できないようにされる。物理的拷問と独房監禁の両方は、主観からどんな助けの機会も剥奪するのであり、だから、明らかに備え付けられた向社会的・利他的傾向を具えた社会的動物としてのわれわれの存在の人間学的基礎に反対に働く。どちらの状況でも、犠牲者は他者と共にどんな「意味をなすこと」へも「参加」できない (De Jaeger and Di Paolo 2007)。

物理的拷問と独房監禁の間の比較のために、暴力の方向性を考慮に入れることがさらに啓発的である。たった今記述された排除は、暴力の方向性のうちの一つである。私はここでパスカル・デロームによってなされた、自分の私秘的な家のような空間に闖入するあるいは自分の身体の統合性を破るという意味での侵入 (Delhom 2014, 162) と閉じられた空間への監禁という意味での排除あるいは故郷から排除されていることと開かれた空間へと送られることを意

味する国外追放の際の排除 (Delhom 2014, 169) との間の有用な区別を指示する。こうした差異化から出発して、私にはそれを、拷問を通じた極端な物理的痛みは侵入の縮図、すなわち、私秘的空間と身体的空間の破壊であるが、それに対して独房監禁による孤立は排除の縮図、すなわち、人が参加できるだろう公共的空間へのアクセスの否定であると捉える。

極端な痛みは主観に対する孤立化効果をもつ (Searry 1985, 11)。なぜなら、それは人に完全に、そこに存在するすべてである自分の痛みのみと向き合っていると感じさせるからであり、誰もそれを取り去ることができないからである。拷問の事例では、そこにいるただ一人、つまり、拷問者は、まさに進んでそれを減少させようとはせず、可能であれば増幅させようとする。この点では、拷問者は、二つの方法の方法へと同時に引っ張り、だから、主観の経験を、いわば別々に引き剥がしている。それは、被害者の身体的空間への根底的侵入だけではなく、犠牲者に自分の身体内部と加害者によって管理される状況の内部に根底的に制限されていると感じさせるかぎりでの孤立でもある。

他方で、監禁の際の捕われた主観の極端な孤独を見るとき、われわれはまた、双方向性を同定することもできる。監房の外側の世界からの排除という明白な方向が存在するだけではなく、主観の意識がほかのところから来るように思える印象に対して透過的になるような、暴力が侵入する方向もまた存在する。思考吹入、幻覚的対象、降り懸かるものとして経験され、患者自身の身体に由来しない感覚というよく知られた徴候を具えた、統合失調症との類似性が顕著である。囚人が報告するように、異的要素が、色や形が、単色で平らな壁しか存在しないところで現れるときのように、知覚に入り込むかもしれない。また、身体的感覚の帰属が困難なることがあり、したがって、囚人は、例えば、感じられる痛みが現実には自分自身の痛みであるのかほかのどれかの痛みであるのかどうかをもはや的確に差異

化することができない (Guenther 2013, 21)。

自・他極性に関する付加的局面は言及するに値する。独房監禁の排除は、身体化された主観性に対するその人間学的に基づけられた可視性からそむけることによって作動する。可視性の領分のなかで——それはハンス・ブルーメンベルクによって非常に明快に記述されている (cf. for example, Blumenberg 2006) ——主観としての身体と客観としての身体の両義性への補完的構造は、見ることと見られることの両義性である (Sartre 1969, 257)。暴力を、二つの極局面の間の均衡の侵害と考えるならば、われわれは、人間存在を空間のなかで見られることがある何かとしての身体の現出か、可視的であることそのものなしに見る作用かのどちらか一方への還元を想像することができる。ポストンの刑務所を訪れた後に、チャールズ・ディケンズによって与えられた例をもって、ギンターは、独房監禁の何らかの段階で「囚人監房のなかのあらゆるものが生命あるものになる。つまり、滑らかな白い壁が忌むべきで恐ろしいものになる。天井でさえ、彼を見下ろしているように思える。この非人格的まなざしから隠れるところはどこにも存在しないが、それなのに遭遇する誰も存在せず、その人に対して現れるだろう人は存在しない」(Guenther 2013, 22)。誰かが独房に捉えられている刑務所の独房のなかには、カメラや他の常時監視手段が設置されているということとは十分にあるだろう。しかしながら、刑罰はここで常時可視的であり、他者を見ることや他者を可視的にすることにはなく、完全に不可視的であることによってなっている。こうした仕方では不可視的にされることは関連のないものにされることになる。

拷問者は、経験の共有される世界に一緒に生きる可能的様態としてのどんな共有性を放棄している「反人間」——「あなたの同胞がなった反対・人間」——としての現在を超える他者であるのに対して (Améry 1980, 40)、「独房監禁

によって誘発されるような孤立状態では、他者はたえず現在の不在の他者になり、仮想現実にとどまるが、しかし、囚人自身の意識の内部の観察する他者の潜在的まなざしを内面化するという潜在力と実効性を例証するためにフーコーによって取り上げられた、有名なパノプティコンの例とはわずかに異なる意味なのである (Foucault 1995, 201)。  
 そこで、実際、囚人は自分の(仮想的な)見られていることに還元される。ここまで記述してきたような独房監禁の際に、捕われている主観は、外部世界によっても、刑務所の牢獄のなかで自分にとって最も近いように思える人々によっても、むしろまったく見られていない。こうした孤立状態では、誰も身体的に現前していないから、すべては、囚人の企投的想像的能力に依存しており、囚人は壁や周りにある対象によって観察されているという幻覚に至ることがある。

結論として、どのようにして暴力が経験の極構造の侵害とみなすことができるのかを究明するはずである経験についての記述的分析から、われわれは最終的に極端な暴力、つまり、物理的拷問と独房監禁という両範例的現象を、ある一定の極性そのものを理念型的に構成するものとみなすことへと向かうことができる。一方で、直面の絶対的無媒介性と、物理的拷問の事例での苦しみの基部に近い源泉である具体的他者によって危害を加えられることが存在する。他方で、どんな他者からも切り離されて、自分自身にだけ直面している状況が存在する。それによって、自己は、苦しみの基部にある源泉に思いがけず転じるが、その一方で、抹消部の源泉、つまり、社会は、その制度的構造という形を取って、刑罰の様態を定義し行使し、手の届かないところにある。けれども、この対照をそのままにしておくことはあまりにも単純にすぎるだろう。先に議論してきたように、痛みは、主観を孤立させる効果をもち、拷問の事例での犠牲者と加害者の間の人格的距離は、人が想像することができる最も偉大な可能なものである。第二



に、心は、主観が相互身体的遭遇から完全に切り離されるとき、匿名的他者との幻覚的關係にしばしば入り込む。それゆえ、抽象化のレベルで、極端な暴力の両形式の間の比較が入り組んでいることを捕らえる適切な像は、再び交差という像だろう。そのなかで身体・主観／身体・客観と自己／他者の關係的體験的構造が縫り合されるのである。

#### 謝辞

私はハーヴァード大学でのマヒンドラ人文学部での「暴力と非暴力」でのメロン・セミナーの参加者と二人の匿名の評者に価値ある註釈に対して感謝したい。本論の研究は、フォルクススヴァーゲン基金によって惜しみなく助成された研究計画「可視性と共感」(FN 88318)の内部で実行された。

#### 参考文献

- Améry, J. (1980). *At the mind's limits*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Améry, J. (1999). *On suicide: A discourse on voluntary death*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Basoglu, M. (2009). A multivariate contextual analysis of torture and cruel, inhuman, and degrading treatments: implications for an evidence-based definition of torture. *American Journal of Orthopsychiatry*, 79(2), 135-145.
- Basoglu, M., Livanou, M., & Cnobaric, C. (2007). Torture vs other cruel, inhuman, and degrading treatment: is the distinction real or apparent? *Archives of General Psychiatry*, 64(3), 277-285.
- Blumenberg, H. (2006). Beschreibung des Menschen. In M. Sommer, (Ed.), Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Butler, J. (2006). *Precarious life: The powers of mourning and violence*. New York, NY: Verso.
- Buytendijk, F. J. J. (1948). Über den Schmerz (trans: Plessner, H.). Bern: Hans Huber.
- Coons, P. M. (1996). Depersonalization and derealization. In L. K. Michelson & W. J. Ray (Eds.), *Handbook of dissociation* (pp.291-305). New York, NY: Springer.
- De Jaeger, H., & Di Paolo, E. (2007). Participatory sense-making: an enactive approach to social cognition. *Phenomenology and the Cog-*

- nine Sciences*, 6, 485-507.
- Delhom, P. (2014). Phänomenologie der erlittenen Gewalt. In M. Staudigl (Ed.), *Geschichte der Gewalt. Beiträge aus phänomenologischer Sicht* (pp.155-174). Wilhelm Fink: Paderborn.
- Dodd, J. (2009). *Violence and phenomenology*. London: Routledge.
- Endress, M., & Ramm, B. (2013). Special issue on Violence—Phenomenological Contributions. *Human Studies*, 36(1).
- Foucault, M. (1995). *Discipline and punish: The birth of the prison*. New York, NY: Doubleday.
- Gallagher, S. (2014). The cruel and unusual phenomenology of solitary confinement. *Frontiers in Psychology*, 5, 1-8.
- Gera, D. L. (2003). *Ancient Greek ideas on speech, language, and civilization*. Oxford: Oxford University Press.
- Griny, C. (2003). Zur Logik der Folter. In D. Mensink & B. Liebsch (Eds.), *Gewalt Verstehen* (pp.79-116). Berlin: Akademie Verlag.
- Griny, C. (2004). *Zerstörte Erfahrung: Eine Phänomenologie des Schmerzes*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Guenther, L. (2013). *Solitary confinement: Social death and its afterlives*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Husserl, E. (1960). *Cartesian Meditations: An Introduction to Phenomenology*. (trans: Cairns, D.). The Hague: Martinus Nijhoff.
- Husserl, E. (1990). *Ideas pertaining to a pure phenomenology and to a phenomenological philosophy. Second book: Studies in the phenomenology of constitution*. Dordrecht: Springer.
- Kall, L. F. (2013). Intercorporeality and the sharability of pain. In L. F. Kall (Ed.), *Dimensions of pain: Humanities and social science perspectives* (pp.27-40). London: Routledge.
- Le Breton, D. (2006). *Anthropologie de la douleur*. Paris: Éditions Métailié.
- Leder, D. (1984). Toward a phenomenology of pain. *Review of Existential Psychology & Psychiatry*, 19(2-3), 255-266.
- Levinson, S. (2007). Slavery and the phenomenology of torture. *Social Research*, 74D[1], 149-168. Accessed 12 March 2016.
- Liebsch, B., & Mensink, D. (2003). *Gewalt Verstehen*. Berlin/New York: de Gruyter.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: Chicago University Press.
- Merleau-Ponty, M. (1964). *Signs*. (trans: McCleary, R.C.). Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Merleau-Ponty, M. (1968). The visible and the invisible: followed by working notes. In A. Lingis, Trans., C. Lefort (Ed.). Evanston, IL:

Northwestern University Press.

- Mertau-Ponty, M. (2002). *Phenomenology of Perception*. (trans: Smith, C.). London: Routledge.
- Morris, D. (1991). *The culture of pain*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Plessner, H. (1970). *Laughing and crying: a study of the limits of human behavior*. Northwestern University Press.
- Plessner, H. (1975). *Die Stufen des Organischen und der Mensch: Einleitung in die philosophische Anthropologie*. Berlin/New York: de Gruyter.
- Plügge, H. (1970). *Vom Spielraum des Leibes: Klinisch-phänomenologische Erwägungen über "Körperschema" und "Phantomglied"*. Salzburg: Müller.
- Portmann, A. (1956). *Zoologie und das neue Bild des Menschen*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt.
- Portmann, A. (1973). Anthropologische Deutung der menschlichen Entwicklungsperiode. In A. Portmann (Ed.), *Vom Lebendigen: Versuche zu einer Wissenschaft vom Menschen* (pp.75-92). Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Ricoeur, P. (1992). *Oneself as Another*. (trans: Blamney, K.). Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Santoni, R. E. (2010). *Sartre on violence: Curiously ambivalent*. University Park, PA: Pennsylvania State Press.
- Sartre, J.-P. (1969). *Being and Nothingness: An Essay on Phenomenological Ontology*. (trans: Barnes, H. E.). New York, NY: Washington Square Press.
- Scarry, E. (1985). *The body in pain: The making and unmaking of the world*. New York, NY: Oxford University Press.
- Sironi, F. (2007). *Psychopathologie des violences collectives*. Paris: Odile Jacob.
- Sofsky, W. (1997). *The order of terror: The concentration camp*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Standigl, M. (2014). Introduction. In M. Standigl (Ed.), *Phenomenologies of violence* (pp.1-32). Leiden/Boston: Brill.
- Taipale, J. (2012). Twofold normality: Husserl and the normative relevance of primordial constitution. *Husserl Studies*, 28 (1), 49-60.
- Van Grunsven, J. (2014). The body exploited: Torture and the destruction of selfhood. In J. De Mul (Ed.), *Plessner's philosophical anthropology: Perspectives and prospects* (pp.149-162). Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Waldenfels, B. (2015). *Sozialität und Alterität: Modi sozialer Erfahrung*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.

- Warneken, F., & Tomasello, M. (2006). Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311 (5765), 1301-1303.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2007). Helping and cooperation at 14 months of age. *Infancy*, 11 (3), 271-294.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2009). Varieties of altruism in children and chimpanzees. *Trends in Cognitive Sciences*, 13 (9), 397-402.
- Wilson, T. D., Reinhard, D. A., Westgate, E. C., Gilbert, D. T., Ellenbeck, N., Hahn, C., et al. (2014). Just think: the challenges of the disengaged mind. *Science*, 345 (6192), 75-77.
- Zahavi, D. (2001). Beyond empathy: phenomenological approaches to intersubjectivity. *Journal of Consciousness Studies*, 8 (5-6), 151-167.
- Zahavi, D. (2014). *Self and other: exploring subjectivity, empathy, and shame*. Oxford: Oxford University Press.

\* 本論文は、Thimo Breyer, *Violence as Violation of Experiential Structures*, in: *Phenomenology and Cognitive Sciences* 16, 2017, pp.737-751の翻訳である。なお「」内は原著者による補足である。訳出に際して、原著者の了解の上で冒頭におかれた要約は割愛した。